

# 重複と類像性(iconicity)

## — 畳語が表す類像的意味とその他の意味 —

清 海 節 子

### 1. はじめに

畳語は、語基全体または、部分的に繰り返される形態論のプロセスであり、世界中の多くの言語に観察されている。本稿は、畳語が表現する意味を確認し、類像性 (iconicity) の視点から考察する。名詞、形容詞、副詞、動詞における意味タイプとそのサブタイプを探り、さらに品詞が別の品詞に変わる「カテゴリー変換」にも言及する。畳語は、一般的に類像的であると思われる。例えば、日本語では「人々」「国々」という繰り返しは、複数を表し、「広々」は、広いことを強調し、また、「歩き歩き考える」と言う、歩くことが継続することを表している。このように、名詞は「複数性」、形容詞は「程度の強調」、動詞は「継続」など、重複と意味との関係性が捉えやすい。しかしながら、言語によっては、重複で「小型化」「程度の弱化」など非類像的な意味を表すことも報告されている。

以下、2 節では、畳語の定義と、類像性について簡潔に説明する。3 節では、先行研究として、Sapir (1921) の提示する意味と例を確認する。4 節では、Kiyomi (1993, 1995) 及び 清海 (2001) を参考に、世界の言語のデータから、畳語で表現される意味タイプを取り上げ、‘iconicity’ (類像性) の観点から検討する。5 節は清海 (2020, 2021) を参考に、日本語の畳語が表すさまざまな意味と ‘iconicity’ との関連性について考察する。6 節では、主に、畳語の意味において唯一代表的で、non-iconic である弱小化について、他の iconic な意味とどのような関係性があるかについて論じる。最後に、7 節では結論を述べる。

### 2. 畳語と類像性

本節は、最初に 2.1 で、畳語の定義を提案する。

次に、2.2 では、類像性について簡潔に説明する。

#### 2.1 畳語の定義

本稿では、英語の ‘reduplication’ (「重複」「反復」) に相当する語として「畳語」を用いる。畳語の定義として、Kiyomi (1995:1145) で提案した以下を採用する。

- (1) “Given a word with a phonological form X then reduplication refers to XX or xX  
(where x is part of X and x can appear either just before X, just after X, or inside X).  
Conditions: (i) XX or xX must be semantically related to X.  
(ii) XX or xX must be productive.”

訳: 「X という音韻的形式の単語を仮定すると、畳語は、XX または xX である (x が X の一部となり、x が X のすぐ前か X のすぐ後か X の内部に現れる)

- 条件: (i) XX または xX は、意味的に X に関係していなければならない。  
(ii) XX または xX は、生産的でなければならない。」

上の 2 つの条件である、語基の意味の関連性と、生産性ということは、擬音語・擬態語や、化石化した畳語を除外することを指す。化石化した畳語とは、語基の意味と反復された畳語との間に意味の関連性が認められない場合、また、過去において生産的に反復のプロセスが見られたが、現在ではそのプロセスが消失したと思われ、語彙化されたと考えられる場合などである。

上で説明したように、語幹全体が繰り返される場

合と、語の一部が繰り返される場合の二種類があるが、さらに、部分的重複は、語の始まり（接頭辞）、語中（接中辞）、語の最後（接尾辞）の三通りがある。部分重複のそれぞれの例を以下に示す。

## (2)(i) 接頭辞

enda「旅行する」 en-enda「目的のある旅行をする」（ランバ語：バンツ）

gindalba「トカゲ」 gindal-gindalba「トカゲ（複数）」（イディン語：オーストラリア）

karaua「注意深く」 kara-karaua「とても注意深く」（ダガ語：パプア）

## (ii) 接中辞

manalala「小さい場所」 mana-na-lala「小さい場所（複数）」（ンガリンギン語：オーストラリア）  
nako「行く」 na-a-ko「行け（命令形）」（キリパテス語：マライ・ポリネシア）

## (iii) 接尾辞

papat「平らな」 papat-pat「幾分平らな」（パコ語：オーストロアジア）

kabary「演説」 kabari-bary「繰り返された演説」（マラガシー語：マライ・ポリネシア）

さらに、疊語において、音変化が起きる場合もよくある。以下がその例である。

## (3)「語幹全部が重複される疊語の音変化」

(i) wida「～を見る」 widu-wida「誰かを見つけ出す」（バガンジ語：オーストラリア）

(ii) nayla「戦う」 nayla-kayla「異なる場所で様々な人々と戦う」（イエサンマヨ語：パプア）

## (4)「部分的重複での音変化」

(i) tegela「強い」 tee-tegela「とても強い」（クワイオ語：マライ・ポリネシア）

(ii) peeleeeg「隠れる」 pel-peeleeeg「何度も隠れる」（ヤップ語：マライ・ポリネシア）

全体が反復される例として、(3i) は、第二音節の母音が [i] → [u]、(3ii) では、最初の子音が [n] → [k] という変化が起きている。部分的に重複される例と

して、(4i) は [te] → [tee]、(4ii) は [peel] → [pel] という母音変化が見られる。

## 2.2 類像性 (iconicity)

類像性 (iconicity) とは、言語表現の意味が、その表現形式と何らかの類似性が見られる現象のことを指す。疊語に関しては、語幹が繰り返されることから、名詞では、複数化、動詞だと反復 / 継続に関連する意味が類像的 (iconic) であると一般的に考えられている。また、形容詞や副詞は、重複により、多くの例で、語幹の意味が強調されるが、この意味変化（強化）も類像的だと捉えることができる。一方で、疊語が語幹の意味を弱めることも、しばしば観察される。例えば、名詞が重複することで語幹の意味に「小ささ」を加えたり、動詞では、重複で、動作の程度が弱まって遂行されることを表す。「強化 / 増大」に対して「弱化 / 縮小」は、反対の概念であり、非類像的 (non-iconic) であると考えerことは自然である。しかしながら、「弱化 / 縮小」と「強化 / 増大」は無関係であるわけではない。6 節で論じるが、「弱化 / 縮小」と「強化 / 増大」は、類像性という観点からは関連性がないと感じられるが、別の視点から捉えることで、何らかの関係性を見出すことになるであろう。

## 3. Sapir (1921)

本節は、疊語研究では先駆者であるサピア (Sapir, 1921) の提示する意味と例を見ることから、基本的な理解を深める。Sapir (1921: 79) は、語幹すべて、または一部が反復されることは、世界の言語で広く見られるプロセスであるとして、その意味については、次のように述べている：‘The process is generally employed, with self-evident symbolism, to indicate such concepts as distribution, plurality, repetition, customary activity, increase of size, added intensity, continuance.’（この過程は、一般に、自明なシンボリズムによって、分配、複数、反復、習慣的動作、大きさの増加、強度の増大、継続などの概念を表すために用いられている（安藤貞雄訳『言語』(2003:131)）。Sapir は、シンボリズムと言っ

ているが、形が意味に反映されるという解釈ができるので、類像性 (iconicity) と言い換えてよいだろう。つまり、Sapir は、豊語が、一般的には、類像的な意味を表すという考えであることがわかる。

Sapir は、系統的ではないが、世界の言語から豊語の例をあげている。それらをまとめると以下のようになる。<sup>1)</sup>

(5) 語幹の反復が見られる例

(i) 基本的な意味を表す例：

ホッテントット語：go-go (まじまじと見る)  
(go: 見る)

ソマリ語：fen-fen (あらゆる側からかじる)  
(fen かじる)

チヌーク語：iwi iwi (注意深く見回す / 調べる)  
(iwi: 見える)

チムシア語：am'am (いくつかはよい (です))  
(am: 良い)

(ii) 抽象的な意味の例：

エウェ語：yiyi (行く, 行く行為 [不定詞]) (yi: 行く)

wowo (なされた [動詞形容詞]) (wo: する)  
mawomawo (しない) (ma= 否定辞)

ホッテントット語：gam-gam (語らせる [使役])  
(gam: 語る)

khoe-khoe (ホッテントット語を話す)  
(khoe-b: 人間, ホッテントット人)

クワキウトル語：metmat (ハマグリを食べる)  
(met-: ハマグリ)

(6) 一部の反復がみられる豊語の例

(起源的には「反復」か「継続」という意味を表す)

(i) 頭部の例

シル語：ggen (眠っている) (gen: 眠る)

フル語：pepeu- 'do (嘘つき：常に嘘をつく人)  
fefe- 'be (嘘つき連中) (fewa: 嘘をつく)

ボントク・イゴロト語：ananak (子供達) (anak: 子供)

kakamu-ek (私はもっと急ぐ) (kamu-ek:

私は急ぐ)

チムシア語：gyigyad (ひとびと) (gyad: ひと)

ナス語：gyigyibayuk (飛んでいるもの)

(gyibayuk: 飛ぶ)

(ii) 語尾の例

ソマリ語：urar (からだ (複数)) ur (からだ)

ハウサ語：sunana-ki (名前 (複数)) suna (名前)

ワショー語：gusus (野牛 (複数)) gusu (野牛)

タケルマ語：himim-d- (よく話しかける)

himi-d- (話しかける)

Sapir(1921: 82) は、語幹の一部分の重複は、語幹全体の重複よりも、多くの言語で、増加の観念とは全く関連のない機能を帯びることがあると述べている。サピアは、その中でも最も知られている例として、以下のような古いインドヨーロッパ諸語の動詞の完了形の例を挙げている。

(7) サンスクリット語：dadarsha (私は見た)

ギリシャ語：leloipa (私は残した)

ラテン語：tetigi (私は触れた)

ゴート語：lelot (私はさせた)

また、ヌートカ語では、以下のように、何らかの接尾辞とともに語幹の最初の音節の反復が生じる。

(8) ヌートカ語：hluhluch-'ituhl (女性の夢を見る)

hluhluch-k'ok (女性に似ている)

(hluch- 女性)

タケルマ語では、動詞には、現在または、過去で使用される形式と、未来及びある叙法と動詞派生語に使用される形式の二つがある。以下に示す例から、語尾の重複 ('eb') が、現在 / 過去 というテンスを表し、未来を表す動詞には、重複がないことが分かる。<sup>2)</sup>

(9) al-yeb-eb-i'n (私は彼に見せる / 見せた)

al-yeb-in (私は彼に見せるだろう)

以上、Sapir の畳語の見解について見てきたが、一言でまとめると次のようになる。畳語が表現することは、Sapir が言うところのシンボリックな意味だけでなく、特に語幹の一部が反復される場合には、繰り返しという形式を反映しない意味もあると提言している。言い換えると、畳語の意味は、「反復」「継続」「増加」のように、類像的な意味だけでなく、動詞の完了形や、接尾辞に関連する場合や、テンスを表す動詞に用いられるような非類像的な意味が含まれていることを認めるべきであると主張している。<sup>3)</sup> 畳語というと、われわれの関心が類像的な意味に偏りがちになるので、以上のような Sapir の観察を十分に受け止めるべきであろう。しかしながら、Sapir は、非類像的な働きの中でも、どのような機能が優勢であるか、また非類像的な用法間の関係性などの詳細については、論じていない。

#### 4. Kivomi (1993)

本節では、主に Kiyomi (1993), 及び Kiyomi (1995) と 清海 (2001) を参考に、世界の言語の量語におけるさまざまな意味と機能を確認していく。Kiyomi(1993) が調査した言語のデータは、総数 89 であり、次の 5 つの語族に属している。(括弧内の数字は調査した言語の数である。)

- (10) バンツー語族 [18]   オーストラリア語族 [20]  
       パプア語族 [14]   オーストロアジア語族 [7]  
       マライ・ポリネシア語族 [30]

以上の言語における畳語を調査した結果、次の二つの機能があると考えられる。

- (11)(i) 基幹語の意味に別の意味特徴を付け加える。
- (ii) 品詞のカテゴリーを変化させる。

(11ii) は、「カテゴリー変換」と呼ぶことにする。Kiyomi (1993:40-42) では、‘The term ‘category change’ means that one part of speech changes into another part of speech by reduplication.’ (「カテゴリー変換」とは、重複により、ある品詞が別

の品詞に変わることである」と提示した。マライ・ポリネシア語族では、この変化が顕著に見られる (Kiyomi 1995)。<sup>4)</sup> また、カテゴリー変換には、他動詞が自動詞になるような品詞内での機能変化(「カテゴリー内変換」)も多くはないが観察される。主要な4種類の品詞(名詞、形容詞、副詞、動詞)を対象に、どのような意味特徴がみられるか、また、どのような「カテゴリー変換」がみられるかについて検討した。

以下、名詞、形容詞、副詞、動詞の順に、意味特徴のタイプを見ていく。<sup>5)</sup> データに使用された言語は四つのうち少なくとも一つの品詞が重複される。また、一つの品詞で複数の意味特徴のある言語も観察されるので、見出された意味特徴の数が、扱った言語の総数以上になることもある。

## 4.1 名詞

名詞には、19 種類の意味特徴が見つかった。その内 13 種類は、次の 3 種類の意味タイプに還元される（カッコ内の数字は、その意味が含まれる言語の数である）。

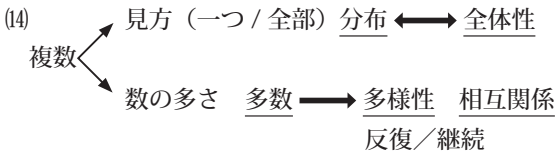
- (12) 複数化 [60] 弱小化 [12] 強化 [11]

上の3種類の意味タイプは、さらに下位の意味のタイプ(=サブタイプ)に分けられる。下位の意味の多い順に並べると次のようになる。

- (13)(i) 複數化 [60]--- 複數 [26] 分布 [17]  
全体性 [7] 多数 [6] 多様性 [2]  
相互關係 [1] 反復 / 継続 [1]
- (ii) 弱小化 [12]--- 模造品 [7] 縮小化 [4]  
通常 [1]
- (iii) 強化 [11]--- 強化 [4] 唯一 [4] 強調 [3]

複数化の下位タイプの関連性については、下の図のように考えることができる。第一に、語幹の重複で、類想的に「複数」という基本的な意味があると仮定する。「複数」の一つ一つに焦点を当てると、「分布」を表すが、全体として複数をみると「全体的性」

を意味する。「複数」の数に注目することで「多数」を表し、数以外の要素にも留意すれば「多様性」などの意味に繋がる。



弱小化の下位タイプは、主に形が小さいことを意味する。「模造品」の例を以下にあげる。

- (15) omah 「家」 omah-omahan<sup>6)</sup> 「おもちゃの家」  
 (ジャワ語: マライ・ポリネシア)  
 anák 「子供」 an-anák 「人形」  
 (イロカノ語: マライ・ポリネシア)

「模造品」と「縮小化」は、語幹の重複により、語幹が表すサイズが小さいという点で共通している。また、「通常」は、名詞の属性が弱められたと捉えられる。従って、弱小化の下位の意味は、語幹の意味の縮小化と弱化を示している。一方、強化は、「強化」「唯一」「強調」という3種類の下位の意味がある。「強化」は、名詞のもつ属性を高める意味であり、「強調」は「本当の～」 「正真正銘の～」を表している。

以上の3種類の意味タイプ(「複数化」「弱小化」「強化」)に含まれなかった、その他6種類の意味は以下の通りである。

- (16) 類似 [4] 具体性 [1] 善良さ [1] 特定 [1]  
曖昧さ [1] 売り主 [1]

すべてのデータを基にして、名詞の畳語の意味を観察すると、「小ささ」を表現する例はあるが、「大きさ」を表現する例がなかった。即ち、複数や多数のように、数を強調する意味はあるが、サイズが強調された「大きさ」を表現する畳語の例が見られなかった。

## 4.2 形容詞

形容詞の畳語には、7種類の意味が見つけられた。その内、6種類は、以下のように、4タイプに還元される。

- (17) 強化 [32] 複数化 [17] 弱小化 [11]  
反復 / 継続 [3]

複数化のみ、次のように3種類の下位の意味がある。

- (18) 複数化 --- 複数 [10] 多数 [5]  
全体性 (名詞を形成) [2]

複数化の下位に分類される3種類の意味は、修飾している名詞が複数であることが共通している。複数の例を以下に示す。

- (19) embo javotoho      embo ja-javotoho  
 男    良い              男    良い (重複)  
 「良い男」              「良い男達」  
 (オロカイヴァ語: パプア)

次に、全体性を表し、名詞を形成する例をみることにする。

- (20) yu:tu 「小さい」    yu-yutu 「すべての子供達」  
 (リサルング語: オーストラリア)

最後に、複数化以外の意味について少し言及する。強化は、形容詞の意味を強調することで、弱小化はその逆で、形容詞の意味を弱め、反復 / 継続は、形容詞の状態が続くことを表す。また、以上紹介した意味の4タイプ以外に、比較級 [3] の例も観察された。

## 4.3 副詞

副詞には、正反対の2種類の意味タイプである強化 [20] と、弱小化 [3] のみで、下位の意味は見つからなかった。観察された言語数から明らかであるが、強化は、弱小化の約7倍である。さらに、実



際には、強化の例は十分なデータが得られたが、弱小化については、以下に挙げる 1 例以外は、確かなデータが得られていなかった。従って、一般的に、副詞は重複されると、語幹の意味が強まる傾向があると言えよう。

- (21) 強化: pitik 「速く」 pitik-pitik 「とても速く」  
 (シロイ語: パプア)  
弱小化: kubi 「悪く」 kubi-kubi 「幾分悪く」  
 (ラニャンコル語: バンツウ)

#### 4.4 動詞

動詞には、26 種類の意味特徴が見つかり、その内の 20 種類は、以下に示す 4 種類の意味タイプに還元される。カッコ内の数は調査した言語総数 (89) より多いが、その理由は、一言語が二つ以上の下位の意味を表すからである。

- (22) 反復 / 継続 [102] 弱小化 [38] 強化 [26]  
複数化 [24]

上のカッコ内の言語数から分かるように、動詞の言語は、半数以上が、反復 / 継続 を表現することがわかる。また、驚くべきことに、2 番目に多く観察される意味が、弱小化であり、強化の例の約 1.5 倍である。4.1-4.3 で見てきたように、名詞、形容詞、副詞では、弱小化の例数が強化を上回ることにはなかった。故に、弱小化の方が、強化より例数が多く観察されたのは、4 品詞の中で動詞だけである。上の 4 種類の意味タイプは、さらに、下位タイプに分類することができる。より多くの言語で使われている順に、それぞれのサブタイプを並べると次のようになる。

- (23(i)) 反復 / 継続 [102]--- 反復 / 継続 [68]  
あちこち [14] 習慣 [9] 進行形 [5]  
同時性 (副詞句形成) [3] 多様な行動 [2]  
未完了 [1] 所格相<sup>7)</sup> [1]  
 (ii) 弱小化 [38]--- 弱小 [17] 無目的 [10]  
無秩序 [3] 試み [2] 不注意 [2]

- 不熱心 [2] みせかけ [2]  
 (iii) 強化 [26]--- 強化 [25] 過剰 [1]  
 (iv) 複数化 [24]--- 複数 [19] 分布 [4]  
相互関係 [1]

(23i) 反復 / 継続は、下位のタイプ 8 種類の中、5 種類 (反復 / 継続 進行形 同時性 未完了 所格相) は、動作が継続的であるか、または、繰り返されることを表している。反復 / 継続 と 同時性の例を見よう。

- (24) 反復 / 継続: tepya 「話す」  
 tepya-tepya 「話し続ける / とりとめなく話す」  
 (デンゲゼ語: バンツウ)  
同時性: busal 「走る」 bu-busal 「走っている間」  
 (アメレ語: パプア)

残りの 3 種類 (あちこち 習慣 多様な行動) は、別の要素も含まれている。例えば、あちこちは、下の例のように、動作が起きる「場所」が言及される。

- (25) baramga: 「跳びはねる」  
 bara-baramga: 「あたりを飛び跳ねる」  
 (ワールバル語: オーストラリア)

(23ii) の弱小化の下位の意味 7 種類は、動作自体が弱まっている 3 種 (弱小 試み みせかけ) と、動作主の態度の低下に言及する 4 種 (無目的 無秩序 不注意 不熱心) に分けられる。弱小 試み 無目的の例を以下に示す。

- (26) 弱小: gadhinma 「粉碎する」  
 gadhi-gadhinma 「いくらか粉碎する」  
 (ンギヤンバー語: オーストラリア)  
試み: dal 「叩く」 da-a-l 「叩くことを試みる」  
 (ムンダリ語: オーストロアジア)  
無目的: luka 「探す」  
 luka-luka 「目的もなく探す」  
 (リンガラ語: バンツウ)

弱小は、動作の程度が低く、小規模になるが、試みとみせかけは、動作の達成度の低下と考える。(23ii)の弱小化の下位 7 種類の違いを図式化してみよう。

(27) 弱小化: 下位の意味

- ・動作の抑制 [程度の低下: 小規模] → 弱小  
[達成度の低下] → 試み  
みせかけ
- ・動作主の意志の低下 → 無目的 無秩序  
不注意 不熱心

次に, (23iii) 強化は, 下位の意味を強化と過剰に分類したが, 過剰も強調の一種として捉えることもできる。強化の例は以下の通りである。

(28) 強化: búng 「悪化させる」

búng-búng 「非常に悪化させる」

(ベトナム語: オーストラアジア)

(23iv) 複数化には、複数、分布、相互関係という 3 種類の下位の意味がある。複数とは、自動詞が重複すると意味的に主語が複数化され、他動詞の場合では、目的語が複数化される。次の例を見てみよう。

- (29) tat 「見つける」 ta-rat<sup>8)</sup> 「複数の…を見つける」  
yur 「横になる」 yu-yur 「複数の…が横になる」  
(マラックマラック語: オーストラリア)

最後に、上で紹介した動詞の畳語で観察された 4 種類のタイプ (反復 / 継続 弱小化 強化 複数化) に含まれなかった意味は、以下に示す 6 種類である。

- (30) 速さ [4] 未来 [2] 気楽さ [1] 命令 [1]  
過去 [1] 目的 [1]

#### 4.5 意味特徴と類像性 (iconicity)

4.1-4.4 まで、名詞、形容詞、副詞、動詞の順に、観察された意味タイプ及び、サブタイプを提示した。ある程度の頻度で観察される意味特徴に焦点を当

て、共通点を探し出そう。名詞は、複数化が最も多く、次に 弱小化 と 強化 を表現する。形容詞は、強化が最も多く、複数化、弱小化が続く。副詞は、一般的に強化を表す。動詞は、反復 / 継続を表す傾向が極めて高く、次には、弱小化が多く、その後に強化と複数化が続く。この結果から、4つの品詞に共通する意味特徴は、強化と弱小化になる。この基本的意味に加えて、名詞と動詞の畳語が意味的に最も関連する複数化と反復 / 継続を考慮に入れると、一般的に畳語において表現される意味タイプは次のように提示できる。

- (31) 畳語は、次の 4 種類の意味タイプに還元され得る: (i)強化 (ii)弱小化 (iii)複数化 (iv)反復 / 継続

上の 4 種の中で、弱小化だけが non-iconic (非類像的)で、他は、iconic (類像的)である。しかし、これは、頻度がある程度高い意味だけを扱い、低かった意味特徴を含めていない。従って、今回のデータには、弱小化のような non-iconic な意味が他にもあることは否定できない。特に、名詞や動詞では、上の 4 種類に含まれない複数の意味 (類似 具体性 速さ 命令 等) が観察された。

#### 4.6 カテゴリー変換と類像性 (iconicity)

語幹は、重複することで、品詞を変えることもできる。これを [カテゴリー変換] と呼ぶことにする。また品詞内で、主に文法的性質に変化が加えられると考えられることがあり、これを [カテゴリー内変換] と呼ぶことにする。[カテゴリー変換] については、基本的な品詞である、名詞、形容詞、副詞、動詞の中で、副詞だけ例が見つからなかった。変換の組み合わせと、その例が使われた言語数は以下の通りである (「x 2」は、あらゆる形態の重複を示し、言語の数は括弧内に記した)。

- (32) 名詞 x 2 = 形容詞 [3] 名詞 x 2 = 副詞 [3]  
名詞 x 2 = 動詞 [1]  
形容詞 x 2 = 名詞 [4] 形容詞 x 2 = 副詞 [3]  
形容詞 x 2 = 動詞 [1]

動詞 x 2 = 名詞 [4] 動詞 x 2 = 形容詞 [3]

動詞 x 2 = 副詞 [3]

上の組み合わせから 3 例を見ることで, iconicity との関連を考える。

### (33) [ カテゴリー変換 ]

#### (i) 名詞 x 2 = 形容詞

yogo 「角」 yogo-yogo 「鋭い」

(セレベット語: パプア)

#### (ii) 形容詞 x 2 = 名詞

ugup 「異なっている」

ugup-ugup 「多くの異なるもの」

(ダガ語: パプア)

#### (iii) 動詞 x 2 = 形容詞

tum 「乾かす」 tum-tum 「乾いている」

(ムリンバタ語: オーストラリア)

(33i) と (33iii) は, 確かに品詞が変わっているが, 語幹の意味に, 複数や強調などの意味が付け加えられるわけではないので, non-iconic の例である。しかし, (33ii) は, 形容詞から名詞に変換されると同時に「多くの」という意味が付け加えられているので, iconic である。このように, [ カテゴリー変換 ] は, non-iconic の例もあれば, iconic な例も見られる。

次に, [ カテゴリー内変換 ] を調べてみると, 以下の 5 種類ある。用いられている言語数は括弧内に書き入れてあるように, 例数が少ない。

#### (34(i) 名詞 (抽象名詞) x 2 = 名詞 (人を表す) [1]

##### (ii) 動詞 x 2 = 分詞 [1]

##### (iii) 形容詞 x 2 = 形容詞 (限定的用法) [1]

##### (iv) 疑問代名詞 x 2 = 不定代名詞 [4]

##### (v) 動詞 (他動詞) x 2 = 動詞 (自動詞) [6]

[ カテゴリー内変換 ] の中で, 例数が多かった (34iv) と (34v) の例を見ることにする。

### (35) [ カテゴリー内変換 ]

#### (i) 疑問代名詞 x 2 = 不定代名詞

apa 「何」 apa-apa 「何でも」

(マレー語: マライ・ポリネシア)

#### (ii) 動詞 (他動詞) x 2 = 動詞 (自動詞)

koso 「切る (他動詞)」

kos-kos 「切る (自動詞)」

(モキレーズ語: マライ・ポリネシア)

[ カテゴリー内変換 ] は, 多くが文法的側面での変化であり, 意味変化はないと考えてよいであろうか。実際, (35i) は, 疑問代名詞が重複により不定代名詞になるのだが, 「何でも」という意味は, 複数化の下位の [ 全体性 ] が含蓄され, iconic と考えられる。他の種類は, 豊語特有の意味が付け加えられないので, non-iconic である。従って [ カテゴリー内変換 ] は, [ カテゴリー変換 ] と同じで, iconic と non-iconic の両方の可能性がある。

## 5. 日本語に於ける豊語の意味

日本語の豊語はどのようなものがあるだろうか。本節では, 日本語の豊語の種類と用法にかんして, 清海 (2020, 2021) を参考に検討する。従来の複数の辞書などでは, それぞれ異なった分類がされている。5.1 では, その中でも, 詳細な説明だと思われる石井 (『日本語学研究事典』2007: 171) に従って用法と意味をまとめる。5.2 では, 石井が論じていない用例を, 『国語学大辞典 第4版』(1984) と『国語学辞典 第11版』(阪倉 1964: 527) を参考に 3 点取り上げる。

### 5.1 石井 (『日本語学研究事典』2007: 171)

石井は, 語形成の観点から「豊語」は, 同じ二つの語基から成立する合成語であり, 複合語とみなしている。主な豊語が 7 つの形成パターンに分けられている。以下は, 豊語の品詞と機能と例をあげて, 筆者がわかりやすくまとめたものである。

#### (36(i) 名詞 多数性

例: 「人々」「山々」「木々」「村々」「家々」「品々」

#### (ii) 名詞 時を表す副詞



例: 「時々」「常々」「日々」「しばしば」<sup>9)</sup>

(iii) 動詞 (連用形) 継続や反復を表す副詞

例: 「泣き泣き」「休み休み」「思い思い」

(iv) 動詞 (連用形) 様子を表す副詞

例: 「生き生き」「散り散り」「のびのび」  
「晴れ晴れ」

(v) ク活用形容詞 (語幹) 強調を表す副詞

例: 「広々」「黒々」「寒々」「近々」

(vi) 副詞 副詞

例: 「まだまだ」「ますます」

(vii) 感動詞 感動詞

例: 「ああ」「まああ」

以上から、5 種類の品詞に畳語が見られることが分かる。名詞、形容詞、副詞、動詞、感動詞である。まず、(36i) の名詞の重複については、複数化と関連する意味であり、iconic の例になる。清海 (2020) で詳しく論じたが、正確には、意味は「複数」ではなく、國廣 (1980) が提言する [個別性を保った不特定多数] を表すと考えることが適切である。その理由は、日本語の畳語が、単数以外を指す複数形 (英語など) とは性質が異なるからである。また、このような意味を表す名詞は生産性がないという見方もあるが、それは正しくない。確かに、「人々」「木々」「家家」は言えるが、「\*猫猫」「\*林林」「\*車車」などは、一般的には言わない。飯間 (2003: 31-36) は、これらは、十分な個性がないため一つの集団として捉えられるため、畳語にならないのだらうと説明している。しかし、文脈によって、名詞に独立した意味をもたせれば、普通は畳語になれない名詞も十分に畳語として成立すると述べて、「猫猫」が自然である文章を作成することに成功している。従って、「山々」が言えるが「猫々」が言えないというのは、程度の問題であると主張している。つまり、文脈によっては、多くの名詞が畳語形として受け入れられるのだらうと示唆している。それでは、最近用いられるようになった新語ではどうであろうか。スマートフォンの略語として使われる「スマホ」でも可能であろうか。試しに、筆者が作ってみた文は次の通りである。

(37) この数週間で、各社から新しいスマホが発売になっている。自分のスマホが古くなって、買い替えたいと思っていたので、今日、近くの売り場に行ってみたら、色とりどりの<sup>ス</sup>マホ<sup>ホ</sup>ス<sup>マ</sup>ホ<sup>ホ</sup>で、店内が生まれ変わったような華やかさだった。

上の状況では、ある程度「スマホスマホ」が自然だと感じられるのではないだろうか。「人々」「山々」のように文脈なしでも自然な名詞畳語は限られているが、上の文のように状況から、[個別性を保った不特定多数] を意味することになれば、他の多くの名詞も重複され得ると考えられる。従って、日本語における名詞の畳語は、生産的であると言っても良いのではないだろうか。

(36ii) の用法として、名詞の畳語には、語基が表す名詞が多数あることを表現する一方で、副詞として時を表すこともある。これは、[カテゴリー変換] で、また「多数」は「複数化」のサブタイプと考えられるので、iconic 的意味も加わっている。(36iii) も、同様に、[カテゴリー変換] で、動詞の重複が、副詞的用法になっている。同時に典型的な iconic 的意味である「継続 / 反復」を表現している。最近使用され始めた「グぐる」<sup>10)</sup> という動詞も畳語として「継続 / 反復」を表すことができる。例えば、「この疑問について、ネットの情報を使って、1 時間以上、ググリ ググリ、ある程度、真相がわかった」と言うことができる。(36iv) も、動詞の重複が副詞的用法になっている [カテゴリー変換] であるが、意味は non-iconic とみなされる「様子」を表現する。

(36v) が示す例は、形容詞の語幹の重複で、[カテゴリー変換] として副詞的用法となり、さらに、iconic な「強調」の意味が加わる。ただ「広々」とは言っても「狭々」と言うことはあまりないだろうし、「早々」と言っても、「遅々」とは言わない。肯定的な意味が畳語になるのであろうか。それでは、最近使われ始めた「エモい」<sup>11)</sup> は、どうであろうか。「とてもエモい」という意味で「\*エモエモ」という副詞は、現在では、まだ使われていないようである。

(36vi) の副詞は、疊語としても品詞は変わらないが、意味が強調されているように感じられるので iconic な例と考えられる。ただ、上の例では、「まだ」が「まだまだ」になる(例:「まだ寒い」「まだまだ寒い」)ことがあっても、「まず」が必ずしも「まずまず」になるとは思われない。例えば、「前期の成績は、まずまず良かった」と言えるが、「\*前期の成績は、まず良かった」とは言えない。(36vii) については、少なくとも上の例から、感動詞は副詞的な用法と考えられるので、感動詞を副詞としてみなすこともできる。副詞的用法としての感動詞の「あら」と「まあ」は、重複すると、(36vi) と同様に、語幹の意味が強調されると考えることができる。

以上から、iconic な意味として、名詞は複数化、動詞は 反復 / 継続、形容詞と副詞(感動詞も含む)は強化を表すことが分かった。また、[カテゴリー変換]では、以下のように iconic と non-iconic の可能性がある。

- (38) 名詞 x 2= 副詞 (iconic: 複数化)  
 形容詞 x 2= 副詞 (iconic: 強化)  
 動詞 x 2= 副詞 (iconic: 反復 / 継続,  
 non-iconic: 様子)

## 5.2 その他の用例

(36) の説明に含まれていない疊語の例で、『国語学大辞典 第4版』(1984)と『国語学辞典 第11版』(阪倉 1964: 527)を参考に、重要であると思われる用法を取り上げる。以下の3点である。

### (39)(i) 「疑問詞」の疊語:

はっきり指定せずにある種のものごとの代用に用いる。

例:「田中なにがしが、いついつどこそこで誰々に会って何々を受けとったという噂だ。」

### (ii) 派生語としての疊語:

「軽々しい」のように「-しい」という接尾辞が付随した語も疊語と考えられる。

### (iii) 生産的用法である「子供子供する」のような構成法がある。

(39i) は、名詞の疊語として捉えることができるかもしれない。<sup>12)</sup> しかし、(39i) の例は、「山々」などとは性質が異なり、重複することで、品詞自体は変わらないが、疑問代名詞から不定代名詞になると思われる。「いついつ」は、「いつかはっきりしないが、過去のいつか」を、「だれだれ」は、「誰かわからない一人か複数の人」を「何々」は、「何かわからないが品物か金銭など何か」を指すと解釈できる。<sup>13)</sup> 一方で、宮地(1989)は、疑問詞を「疑問、あるいは、不定の物事を表す語」とみなし、品詞とは別の観点による語群であると述べている。「いつ、だれ、どこ、なに」は代名詞、「幾つ、幾ら、何人」は数詞、「なぜ、どう、どうして」は副詞、「どの、どんな」は連体詞である。次の例をあげて、強調、複数、列挙などの意味が加わると述べている。

(40)(i) いついつまでもお元気で。

(ii) 来るのはだれだれだ?

(iii) どうどうしたとちゃんと書け。

上の例を少し考えてみよう。「いつ」「だれ」「どう」がそれぞれ重複されている。(40i) は「いつまでもお元気で」と言えるが、「いついつ」は、「ずっといつまでも」という強調の意味になる。(40ii) は、疑問詞としての疊語で、複数を表すと考えられる。というのは、「来るのは、だれだ?」というとき、来るのが一人か複数の二つの可能性がある。しかし、「来るのは、だれだれだ?」と聞くことは、一人でなく、複数の人が来るという前提で聞いていることは明らかである。(40iii) は、筆者には、少々不自然に聞こえる。宮地は「列挙」という意味が加わったと考えているのであろうが、筆者には(40ii)の「だれだれ」と同様に「複数」を表しているように思える。つまり、「どのようにしたか」という手段や方法が複数あるという前提で相手に話していると解釈できる。以上から、疑問詞の疊語は、名詞として扱うとしても、疊語の意味が単なる複数だけを表すのではなく、疑問代名詞が不定代名詞になることもあり、複雑である。

ところで、このような疑問代名詞の畳語プロセスは、4.6 で既に見た通り、他言語でも見られる。次の例では意味は日本語の場合とは異なっている。

- (41) ジャワ語 (マライ・ポリネシア)  
sapa 「誰」 sapa-sapa 「誰でも」

上の例は、重複によって、単なる意味の変化が生じたとは考えずに、疑問代名詞が不定代名詞に変化する [ カテゴリー内変換 ] の例とみなすべきであろう。同時に「誰か」が「誰でも」という意味変化が加わり、複数と関係する [ 全体性 ] の意味を帯びたと捉えるべきであろう。それでは、日本語の例に戻って考えてみよう。日本語の「疑問代名詞」については、以下のように 2 種類の畳語が存在するといえる。

- (42)(i) ‘iconic’ :  
・ 疑問代名詞としての畳語  
・ 重複で疑問代名詞が不定代名詞になる [ カテゴリー内変換 ]  
(ii) ‘non-iconic’ :  
・ 重複で疑問代名詞が不定代名詞になる [ カテゴリー内変換 ]

(42i) の疑問代名詞の例は、「誰々が来たの?」、「何々をしたの?」の文における「誰々」「何々」であり、「複数の人 / こと」を表し、‘iconic’(類像的)である。[ カテゴリー内変換 ] の例は、「いついつまでも..」であり、強化を表すので、‘iconic’である。それに対し、(42ii) の例で「その件は、誰々の意見から、もう続けないことに決まったらしい」という文の「誰々」は、不特定の単数(「誰か一人」)を表すことが可能で、必ずしも複数を意味しない。従って、‘non-iconic’(類像的ではない)である。

次に、(39ii) 派生語としての畳語であるが、<sup>じゅうてつ</sup>「重綴」(部分的な重複)と呼ばれることもある。接尾辞「-しい」を伴いながらも語幹の反復が含まれるので、畳語として扱って問題ないように思われる。『スーパー大辞林』(2005 - 2021 電子版)によると、「軽々しい」の意味には「ひどく軽い感じである」

を含んでいるため、この派生語の意味は、iconic としての強化を表すと考える。

また、(39iii) 生産的用法の「子供子供する」という構成法は、実際には、「子供子供した / している」と言う表現で使われ、「いかにも本当の意味で子供らしい」ことを表す。他に、「田舎田舎した / している」「女の子の子した / している」「野菜野菜した / している」などあり、小野 (2015) は、このような「XX した / している」を構文的重複語と呼び、日本語の畳語は語彙化されたものが多いが、それに対して、この種の畳語構文は生産性が高いと述べている。また、徐 (2016) は、この構文で表現される畳語が、名詞畳語の用法の典型的な意味である複数ではなく、擬態的な意味を表すと考えている。(39ii) と同様に、(39iii) も、重複によって、意味の変化が見られる点から、畳語として扱うことは問題ないであろう。それでは、iconicity に関しては何が言えるであろうか。この「[ 重複形 ] した / している」という構文とは、「いかにも本当の意味で…らしい」を表現するので、4 節で紹介した強化のサブタイプの一つの強調に関連すると思われる。4 節では例を挙げなかったので、次に例を見ることにする。

- (43) 強調 [ 強化のサブタイプ ]  
mwa-múna 「男性 / 夫」(mwa= 接頭辞)  
mwa-múna-múna 「正真正銘の 男性 / 夫」  
(チチェワ語: パンツー)

日本語の場合、強調を表す場合は、重複形の後に「した / している」が来なければならないので、純粋な畳語とは言えないかもしれないが、意味的には、iconic であると言えるだろう。

### 5.3 日本語の畳語と類像性 (iconicity)

5.1-5.2 から、日本語での主要な品詞の重複で、品詞が変わらない場合に生じる意味は、大部分が iconic であることが分かった。各品詞に対する意味をまとめると以下ようになる。

- (44) 日本語の畳語: 意味タイプ

名詞: iconic 複数化 強化 (強調)

形容詞: iconic 強化

副詞: iconic 強化

動詞: iconic 反復 / 継続

また、カテゴリーに変化がある場合には、以下のよう iconic と non-iconic の意味が観察される。

(45)(i) [ カテゴリー変換 ]

名詞 x2= 副詞 (iconic: 複数化)

形容詞 x2= 副詞 (iconic: 強化)

動詞 x2= 副詞 (iconic: 反復 / 継続,  
non-iconic: 様子)

(ii) [ カテゴリー内変換 ]

名詞 (疑問代名詞→不定代名詞)

(iconic: 強化, non-iconic: 単数)

## 6. 考察

4 節では、5 つの語族における 89 言語のデータをもとに名詞、形容詞、副詞、動詞の意味タイプを探り、ある程度の頻度で観察された意味は次の 4 種類に還元された: (i)強化 (ii)弱小化 (iii)複数化 (iv)反復 / 継続。弱小化だけが non-iconic (非類像的) で、他は、iconic (類像的) であった。なぜ、non-iconic の意味が含まれているのであろうか。

2.2 でも述べたが、「強化 / 増大」と「弱小化 / 縮小」は、正反対の概念である。畳語における語幹の重複という形式が意味に反映されているのは、一般的に「強化 / 増大」であり、意味が強められたり、複数形を示すので、iconic とみなされる。他方、「弱小化 / 縮小」は、意味が弱められたり、サイズが縮小されていることを表すため、non-iconic だと考えることは自然であろう。しかしながら、Kiyomi (1995) は、「強化 / 増大」と「弱小化 / 縮小」は、「…に…」して、より (高い / 低い) 程度の」という同じ意味的原理を持ち、反対の方向に映し出された二つの意味と提示した。

別の視点から検討すると、「強化 / 増大」と「弱小化 / 縮小」は反義的であり、それ故、似た性質だと

いえるのである。具体的な反義語に例えて、考えてみよう。「高い—低い」は、垂直の高さという共通の次元について、程度の違いが異なっている対の語であるので反義語なのである。一方、共通性がない異なる次元で、程度が異なっている語の対の例である「高い—重い」や、「硬い—低い」は、反義語にはならない。Cruse (1986: 197) によると、反義語は、意味の一つの次元では両極端にあるが、他の次元では同じなのである。従って、違っていると同時に類似しているという逆説的な性質である。実際、われわれは、直感的には、意味が最大限に離れていると感じたりするが、実は、反義語の分布は、ほとんど同じであり、そのため、言い間違えに反義語を選ぶことがあると述べている。従って、筆者の考えでは「弱小化 / 縮小」は non-iconic であるが、iconic でないとも言えない。その理由は、畳語の基本的意味としての「弱小化 / 縮小」は元来 iconic ではないが、「強化 / 増大」と反義的な性質のため、意味的に多くの次元に関連しているはずである。「強化 / 増大」が iconic であるため、「弱小化 / 縮小」も iconicity (類像性) と間接的にはあるが、何らかの関係性があると感じることは正しいことになる。つまり、「弱小化 / 縮小」自体は iconic ではないが、「強化 / 増大」とは反義的であることから、iconicity との関連性を完全に否定することができないのである。

5 節では、日本語の畳語について考察したが、大部分が iconic であり、弱小化の例は見られなかった。しかし [ カテゴリー変換 (動詞 x 2 = 副詞 (様子)) ] と [ カテゴリー内変換名詞 (疑問代名詞→不定代名詞) (単数) ] で、non-iconic の意味があることが分かった。このように、日本語では、畳語の多くの意味は iconic であるが、non-iconic の意味も表現されていることが確認された。

最後に、弱小化とそれ以外の意味が、ストレスによって区別される興味深い例を見ることにする。Wolfenden (1971) によると、ヒリガイノン語 (マライ・ポリネシア語族) の畳語は、ストレス (stress ‘強勢’) の位置の違いにより、意味が区別される。弱小化を意味するときは、ストレスが異なる音節に生じる。以下のように語幹が重複するが、ストレス



の位置が同じではない。<sup>14)</sup>

- (46) baláy 「家」 balày-baláy 「人形の家」  
 nánay 「母」 nanày-nánay 「見せかけの母」  
 lakát 「歩く」 lakàt-lakat 「少し歩く」  
 dásig 「速く」 dasig-dásig 「少しより速く」

一方、複数や分布を表す場合には、以下のように、ストレスの位置が同じ音節に生じる。

- (47) baláy 「家」 baláy-baláy 「全ての家 / それぞれの家」  
 sunód 「次の」 sunod- sunód 「次々と」  
 dúgay 「期間」 dugày - dugáy 「後で」  
 túig 「年」 tuíg - tuíg 「年間の、毎年」

この言語では、強勢型が重要な役割を果たしていることが分かる。重複という形態論のプロセスのみでは正しい意味が伝わらないため、重複は単なる語幹の繰り返しと捉えることの危険性を示唆している。

さて、上のデータから iconicity との関連性について考えてみたい。上の (46) と (47) の例では「家」が「人形の家」と「全ての家」を表すことが可能である。まず、「全ての家」(baláy-baláy) について考える。この畳語プロセスは典型的なもので、語幹全てが繰り返され、強勢型も変化なく繰り返されている。これは、iconic (類像的) な例である。つまり同じストレスの音が繰り返されることで、それが複数化と言う概念につながるのである。一方で、「人形の家」(balày-baláy) の場合、強勢型に変化があり、最初の語幹より2番目が強いことが分かる。(46) の他の例でも、同様に、最初の語幹ではなく、2番目の語幹の母音が最も強く発音されている。ここでは、母音の強勢対比があり、最初の語幹の母音の方が弱いことが弱小化という意味に繋がるのではないかと想像できる。

(47) の baláy 以外の例について、指摘すべき点がある。それは、強勢から読み取れる特徴である。最後の例の túig は、1 音節しかないのに、除外し、残りの sunód と、dúgay に注目しよう。両語にお

ける畳語の強勢位置は、基の語幹とは異なっている。即ち、sunód は、第二音節から第一音節に移り (sunod- sunód), dúgay は、第一音節から第二音節に移っている (dugày - dugáy)。このような音節の移動は、baláy には見られない上、意味も baláy とは違って、副詞 (または形容詞) を表すようである。以上から、(47) の baláy 以外の3語は、畳語では、意味の付加と捉えるより、品詞が変えられている [ カテゴリー変換 ] とみなされるべきであろう。要するに、ヒリガイノン語では、強勢が畳語の複数の異なる意味を識別するために重要な役割を担っているのである。

## 7. 結論

本稿は、畳語が表現する意味にかんして、名詞、形容詞、副詞、動詞における意味タイプを探り、さらに類像性という観点から考察した。2 節では、畳語の定義と、類像性の簡潔な説明をし、3 節では、Sapir (1921) の提示する意味と例を確認した。4 節では、Kiyomi (1993, 1995) 及び清海 (2001) のデータを基に、意味タイプ・サブタイプを検討し、‘iconicity’ (類像性) の観点から論じた。その後、5 節では、清海 (2020, 2021) を参考に、日本語の畳語について考察した。6 節では、non-iconic である弱小化について、他の iconic な意味との関連性を提示した。また、強勢を利用することで、弱小化と他の意味を区別する言語にも言及した。

本稿の結論としては、次の3点があげられる。第一に、畳語は一般的に iconic である傾向が見られるということである。データからさまざまな意味が生じることが分かるが、基本タイプとしては、強化, 弱小化, 複数化, 反復 / 継続 の4種といえよう。日本語の畳語には、弱小化 以外の3種の意味タイプが観察された。第二に、弱小化 は、non-iconic ではあるが、iconicity とは無関係ではないことを提案した。その理由は、他の iconic な意味との関連性があると思われるからである。第三に、本稿では詳しく検討できなかったが、一つの形で iconic と non-iconic の意味が生じることもあり、例えば、日本語でも、「何々」「誰々」は、iconic な複数だけで



なく, non-iconic として単数をも意味するのである。

注

- 1) 以下の日本語訳は、安藤 (2003) を使用している。
- 2) 『明解言語学辞典』(長屋 2015: 155) によると、タガログ語では、未来形に豊語が用いられている: bigyan 「与える」 bi~bigyan 「与えるだろう」
- 3) Sapir (1915) は、Comox 語における名詞の豊語を考察している。その中で「複数」「指小辞」「指小の複数 (diminutive plurals)」を表す重複の型について、主に音声に関する分析を詳細に記述している。ところが、類像的ではない Comox 語の名詞における指小辞を表す重複の例が Sapir (1921) の中では取り上げられていない。
- 4) 清海 (2001: 92-93) も参照のこと。
- 5) 意味の隣の数字はデータの中での例数を示している。また、各例の言語名と語族も例の最後に書いた。
- 6) [-an] は、接尾辞である。
- 7) 所格相 ('locative aspect') の例として次の例がある。  
na'u 「降りる」 ma-na'u-na'u 「降りてから戻ってくる」 (ma= 非現実法)  
(ダア語: マライ・ポリネシア)
- 8) マラックマラック語の部分的重複では、語幹の最初の子音が流音 ('liquid') になる。
- 9) 「しばしば」は、ここに入れるべきではないと思われる。その理由は、「しば」と言う語が名詞として使われないからである。「しば (屢)」だけでも「動作作用の回数を重ねて繰り返される意を表す。しばしば。しきりに。何度も」(『小学館精選版日本国語辞典』2008 電子版) を表現するので、副詞である。従って、「時々」のように、「時」という名詞の重複が副詞として用いられることとは異なり、元来「しばしば」は「しば」と同じ意味なのである。『広辞苑 第七版』(2018 電子版) では、「しば (屢)」は、「動詞の上に付き、しばしばの意味を表す」として、次の例を挙げている:「かほ鳥の間なくしば鳴く春の野に」(万

葉集 17) 同様に、『スーパー大辞林』(2005 - 2021 電子版) の説明は「動詞の上に付いて、接頭語的に用い、動作・作用が何度も繰り返される意を表す。しばしば。しきりに」とあり、「清き川原に千鳥一鳴く」〈万葉集 925〉「しきたへの児を一見れば」〈万葉集 1999〉という例をあげている。『旺文社全訳古語辞典 第四版』(2014) にも、参考として、「しば鳴く」「しば立つ」「しば見る」などのように、動詞に冠して用いられることが多い」と書かれている。

- 10) 『スーパー大辞林』(電子版) によると、「ググる」は、「俗に、検索エンジンの Google (グーグル) を利用して、インターネットの中から目的に応じた情報を検索すること」である。
- 11) 『スーパー大辞林』(電子版) によると、「エモい」の意味は、「俗に、心に響く様子。エモイとも。[感動を意味するエモーション (emotion) から]」である。
- 12) 疑問代名詞の豊語は、清海 (2020, 2021) では扱っていない。
- 13) 筆者が子供の頃、家族でよく遊んだゲームの名称が「誰々がどこどこで何々をした」または、省略して「誰々が何々を」であった。ゲームと言っても勝ち負けがあるわけではなく単に楽しむものである。二人以上でできる遊びで、小さな白紙の表に 1, 2, 3 と書き、裏に次のように各自が他の参加者に見えないように記入する。1 は、各参加者が知っている人の名前、2 には場所、3 には何をしたかをそれぞれ書き入れる。ある程度の記入ができれば、記入したすべての紙を 1, 2, 3 と別々に集めて、シャッフルする。次に参加者が 1, 2, 3 の順に読み上げる。順番が変わっているので、ときには、かなり面白い組み合わせの文章ができ、一緒に笑ったりして楽しむことができる。ところで、名称は「誰々がどこどこで何々をした」であるが、実際に書き込んだ内容は、単数である方が多かった。つまり、1 番には一人の名前が多く、たまに二人以上の名前を書くこともあった。2 番も一つの場所名が多く、3 番は、一つの動作か二つ以上 (例:「たくさん食べてすぐに運動し

た) などであった。つまり、畳語でも、単数を表していたことになり、non-iconic 的用法である。  
14) 以下は、Urbanczyk (2005: 220) が取り上げている例である。意味は、清海 (2001) も参照した。

#### 参考文献

- 飯間浩明 2003.『遊ぶ日本語 不思議な日本語』(岩波アクティブ新書 75), 岩波書店, 東京.
- 小野尚之 2015.「構文的重複語形成—『女の子の子した女』めぐって—」由本陽子・小野尚之(編)『語彙意味論の新たな可能性を探って』463-389, 開拓社.
- 清海節子 2001.「反復語の機能的特徴」『駿河台大学論叢』23: 77-100.
- 清海節子 2020.「日本語の畳語一名詞の畳語が表現する意味の可能性—」『駿河台大学論叢』60: 13-27.
- 清海節子 2021.「日本語における名詞の畳語—古代語の和語畳語形が表す意味との比較—」『駿河台大学論叢』61: 35-50.
- 國廣哲彌 1980.「総説」國廣哲彌(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店, 1-22.
- 徐一平 2016.「日本語の名詞が畳語の形で擬態的な意味を表す問題について—コーパスの役割も同時に考える—」『日本語・日本学研究 / 東京外国語大学国際日本研究センター [編] (Journal for Japanese studies)』6: 153-162.
- Cruse, Alan, D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kiyomi, Setsuko. (1993). *A typological study of reduplication as morph-semantic process: evidence from five language families*. Unpublished Ph.D dissertation, Indiana University.
- Kiyomi, Setsuko. (1995). 'A new approach to reduplication: a semantic study of noun and verb reduplication in the Malayo-Polynesian languages.' *Linguistics* 33.6, 1145-1167.
- Sapir, Edward. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Hartcourt, Brace and Company: New York. (Paperback edition (2004) Dover Publications: New York.; 安藤貞雄訳『言語』(2003) 岩波文庫)
- Sapir, Edward. 1915. *Noun Reduplication in Comox, A Salish Language of Vancouver Island*. Leopold Classic Library. (*Noun reduplication in Comox, a Salish language of Vancouver Island. Canada Department of Mines Geological Survey. Memoir 63. No. 6 Anthropological Series* - 2015/7/4)
- Urbanczyk, Suzanne. 2005. 'Enhancing contrast in reduplication.' In *Studies on Reduplication* Bernhard Hurch (ed.), 211-237. New York: Mouton de Gruyter.
- Wolfenden, Elmer P. 1971. *Hiligaynon Reference Grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.

#### 辞典

- 石井正彦 2007.「畳語」飛田良文・遠藤好英(他)(編)『日本語学研究事典』明治書院, 171.
- 国語学会(編) 1984.『国語学大辞典 第四版』東京堂出版.
- 阪倉篤義 1964.「畳語」『国語学辞典』国語学会(編) 東京堂出版, 527. 角川書店, 東京.
- 小学館国語辞典編集部(編) 2008.『小学館精選版 日本国語辞典』(電子版) 小学館.
- 長屋尚典 2015.「重複」斎藤純男・田口 善久・西村 義樹(編)『明解言語学辞典』三省堂, 155.
- 新村出(編) 2018.『広辞苑 第七版』(電子版) 岩波書店.
- 松村明(監修) 2005 - 2021.『スーパー大辞林』(電子版) バージョン 2.3.0 (284) 三省堂.
- 宮腰賢・石井正己・小田勝(編) 2014.『旺文社 全訳古語辞典 第四版』旺文社.
- 宮地裕 1989.「疑問代名詞」「疑問詞」日本語教育学会(編)『日本語教育事典』大修館書店, 115, 117.

